

研 究

子供の入院に付き添う母親の求めている情報

— 適切な時期に適切な情報が伝わる看護を目指して —

浜松赤十字病院 看護部
渡邊啓栄子 中山潔美 吉田直子
昭和大学横浜市北部病院 看護部
萩原ちはる

要 旨

母親は、我が子の予期せぬ入院に対して動揺し、多大な不安を感じるものである。我々は、入院時から退院時までに母親の求める情報に変化があるか否か検討した。対象は、入院した児に付き添う母親36例で、入院体験の有る児の母親21例、無い児の母親15例に分類した。入院時、三日目、退院時の三時点で母親の求める情報をアンケート用紙により聞き取り調査を行った。母親の求める情報は、入院体験有りの群では入院時から退院時まで経過に関係なく内容も幅広く、一方、入院体験無し群では入院当初は入院生活へ適応するためのものが多く、その後退院に関する事に変化していた。入院後の各時点における母親が求める各情報の回答率は2群間で有意差を認めなかった。以上より入院後の経過期間、入院経験の有無によって求める情報が異なることが判明した。看護者は、患児の入院歴、入院の経過期間に十分配慮した情報提供を行う必要がある。

Key words

乳幼児に付き添う母親、情報提供、入院経過、入院体験の有無

I. はじめに

母親は、乳幼児の予期せぬ入院に対してパニックを起こしやすい。入院によって起こる不安に、動揺を隠せず泣いてしまう母親を多く見かけてきた。その為、入院時にパンフレットを用いながらオリエンテーションを行い、不安が軽減するように努めてきた。しかし、その情報は本当に母親が求める情報だったのかを明らかにした事はない。

母親の不安に対して、及川¹⁾は入院して2～3日過ぎる頃から母親は子供の入院についての状況すなわち、病気の種類、入院期間、家族に及ぼす影響について理解し始める事や入院回数が増えると、不安や不満を募らせる事²⁾を指摘している。つまり、子供の入院による母親の不安は入院の経過によって変化し、入院の回数によっても不安や求める情報が異なる事を示している。そこで

今回の研究では、母親の求めている情報に着目し、子供の入院による母親の不安の種類とその変化を経時的に明らかにしようと考えた。そこから、適切な時期に適切な情報が伝わるには母親に対してどのような関わりが必要であるかについて考察する。

II. 研究方法

1. 研究方法：聞き取りによるアンケート調査法 (表1)
2. 調査期間：平成12年9月～平成13年6月
3. 対 象：急性期疾患で入院中の乳幼児に付き添う母親36例のうち入院体験の有る児の母親21例 (以下入院有とする)、入院体験の無い児の母親15例 (以下入院無とする)。入院の有無については当病院の入院体験により分類した。アンケート調査をするにあたって協

力が得られた母親に限定して調査を行った。

4. 調査時期：入院時，三日目，退院時。
5. 調査内容：（1）病棟の構造（2）入院システム（付き添い，食事）（3）子供自身の事（病気，治療，薬に関する事，今後の見通し，退院について）（4）家の事（入院費，家族）（5）その他
6. 分析方法：統計ソフトエクセルを用いて集計した。また，入院時，三日目，退院時の各時点において入院体験の有無による2群間で調査項目の回答率に有意差があるか否か χ^2 検定により分析した。さらに，各群において入院時，三日目，退院時の三時点において回答率が変化（経時的な変化）するか否か χ^2 検定により分析した。

Ⅲ. 結 果

1. 児の年齢と疾患及び母親の年齢

子供の年齢は，0歳～3歳は23例63.8%で，4歳～6歳は8例22.2%で，7歳～15歳は5例13.8%であった。児の疾患は，肺炎10例27.7%で，喘息10例27.7%で，胃腸炎4例11.1%でその他12例33.3%であった。母親の年齢は，20代8例22.2%で，30代23例63.8%で，40代5例13.8%であった。

2. 母親が求める情報の特徴（図1，2）

1) 入院体験のある児の母親

アンケートの調査項目の回答率では，入院時の母親の求めている情報は，病気の原因19.0%，薬19.0%，退院の事19.0%で，「薬効をしりたい」，

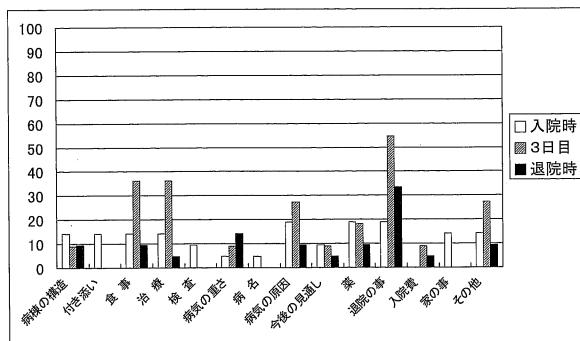


図1 入院体験の有る児の母親の求める情報の回答率の結果

表1 アンケート調査内容

突然の入院に不安も強く，わからない事も多いと思います。お子さまの不安はもちろん，付き添うお母様方の不安や心配事が最小限に入院生活が送れるように今回，「適切な時期に適切な情報が提供出来る看護」を目指して，見直し改善していきたいと思います。

下記の項目にそってお話を伺いたいと思います。ご協力お願いいたします。

(病棟施設)

- ・病棟の構造でわからなかった事がありますか。

(入院システム)

- ・入院生活で心配な事がありますか。
- ・付き添いについて・食事について

(子供自身の事)

- ・治療，検査についてわからなかった事がありますか。
- ・病気の重さ，病名，原因について心配な事がありますか。
- ・今後の見通しについてわからなかった事がありますか。
- ・薬について心配な事がありますか。
- ・退院後の注意点について心配な事がありますか。

(家のこと)

- ・入院費についてわからない事がありますか。
- ・子育て，残してきた家族の心配な事はありませんか。

(その他)

「再発予防の事」であった。

三日目になると，退院の事54.5%となり，次いで，食事36.6%，治療36.3%に関する事であった。内容は，「退院したら保育園にすぐいけるか」，「食事内容を変更してほしい」，「点滴をいつまでするのか」という情報を求めている。

退院時は，退院の事が33.3%，次いで病気の重さ14.2%，病気の原因14.2%が上がり，退院時で

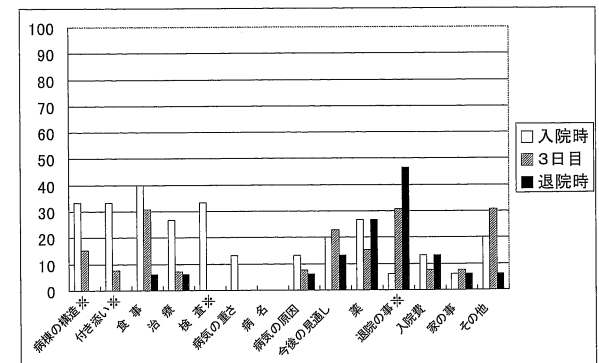


図2 入院体験の無い児の母親の求める情報の回答率の結果

もなお「再発の可能性はどのくらいなのか」, 「MRSAの感染の原因や熱が下がらない原因が知りたい」という情報を求めている。

2) 入院体験の無い児の母親

アンケートの調査項目の回答率では, 入院時の母親の求めている情報は, 食事が最も多く40.0%であり, その内容は「食欲がないがどうしたらよいか」というような情報というより不安を訴えていた。次いで病棟の構造33.3%, 付き添い33.3%, 検査33.3%で「各構造の場所や位置が判らない」, 「レントゲンや採血等の検査結果を知りたい」というような情報を求めている。

三日目になると, 食事30.7%, 退院の事30.7%で, 「お粥はいつから米飯になるのか」, 「自宅での発作の対応をどうしたらいいのか」というようなかなり具体的な情報を求め不安を訴えるようになっていた。次いで今後の見通し23.0%であり, その内容は「いつ頃退院できるのか」であった。

退院時では, 退院の事が46.6%で「どの程度で受診したらよいか」, 「日常生活の注意点」であった。次いで, 薬26.6%, 今後の見通し26.6%で「退院処方の内容が知りたい」, 「退院はいつ頃できるのか」であった。

3. 入院体験の有無による回答率の比較

入院後の3つの各時点における母親が求める情報の回答率は, 2群間で有意差を認めなかった。

4. 入院経過に伴う母親の求めている情報の変化に関する検討(図1, 2)

入院時, 三日目, 退院時の三時点をもとに, 母親が求める情報は入院体験有の群では有意な経時的変化は見られなかった。一方, 入院無の群では, 病棟の構造 (χ^2 P値=0.0468, $p < 0.05$), 付き添い (χ^2 P値=0.0229, $p < 0.05$), 検査 (χ^2 P値=0.0051, $p < 0.05$), 退院の事 (χ^2 P値=0.0488, $p < 0.05$) について有意差を認めた。すなわち, 入院当初は病棟の構造, 付き添い, 検査について, その後退院の事について情報を求めている。

IV. 考 察

今回我々の行った研究は, アンケート調査をも

とに, 母親の求める情報が入院時, 三日目, 退院時の三時点において変化するか否か, また入院体験の有無により異なるか否か検討したものである。今回の検討により, 以下の成績を得た。①母親の求める情報は, 入院体験有の群では入院時から退院時まで経過に関係なく内容も幅広いものであった。②その内容として入院初期には疾患の原因, 再発の予防に関する情報を求める傾向にあった。③入院体験無の群において求める情報は, 入院当初は入院生活へ適応するためのものが多く, その後退院に関する事に変化していた。

入院有の母親は, 入院中, 時期にかかわらず幅広く情報を求めるため, 看護者はどの時期においても各情報を的確に提供できるよう準備しておく事が重要である。我々は, 入院有の母親は入院無の母親に比べて以前の入院体験を元に入院生活をイメージしやすいため入院生活に関しての情報を求める声は少ないと考えていた。しかし, 母親は入院時から入院過程をいかにによりよいものとしていくのかを判断し幅広い範囲で情報を求めている。母親は以前の入院経験を振り返り, 不満に感じた点について改善を求めているのである。逆に考えれば, 我々医療者は患者, あるいはその付き添い者に対して十分に快適な入院治療環境を提供していない可能性があるといえる。看護者は, 母親が常に患児の入院生活をより過ごしやすくしようとする思いがある事をふまえた上で, 母子共に過ごしやすい環境を整えより効果的な治療を行えるように情報提供を行っていく必要がある。

入院有の母親は, 入院初期から中期にかけて疾患の原因と再発予防に向けての情報を多く求める傾向があった事から, 入院を繰り返す事により母親の子供の健康に対する関心が高まっていく事が伺える。武貞ら⁵⁾は, 親は自分の子供が病気になり入院を要するとなれば, 不安と自責の念を抱き不安にかられ思い過ごし, いやな空気で一杯になると, 述べているように, 母親は看護者が思う以上に入院という事態に, 原因は何だったのか, もう繰り返したくないという思いがある。当病棟における, 母親への対応としては入院中コミュニケーションをとる中で病気に関する説明をする事と退院時に日常生活の注意事項を記入した用紙を渡す

事に留まっている。看護者は、入院時から患児の症状に合わせて適切な医療情報を提供していくと共に、児の再発予防と対策に絞った退院指導を積極的に進めていく必要がある。特に、再発予防の面から考えれば、初回入院の際に十分な退院指導を行っていく事が重要といえる。

入院無の母親は、当初は入院生活がスムーズに送れるような情報を求め、児の症状が安定してくる頃より退院についての情報を求めている事は、初回入院の母親に対しては入院初期に繰り返して十分なオリエンテーションを行う事の重要性を示唆している。今回の調査で、入院環境に早く適応するための日常生活に関する情報が主体で、疾患についての情報を求める声が高かった事は、父親、母親と共に病気に関する不安が最も高く、入院生活への不安が次いで高いという藤原の報告⁴⁾とは全く反対の結果といえる。その要因としては、児の重症度が比較的軽く生命危機に直結していない事が考えられる。入院時の母親は児の病状に対する不安が高いと考えていた為、当病棟では、必ず入院時に検査結果と共に病状の説明を行ってきた。今回の調査結果は入院時の母親が求めている情報と医療者が提供している情報は合致していない事を示している。しかし、病気の診断や重症度などの予測がたたないと現実認知が最も遅くなる⁴⁾と報告されているように、母親が、患児の病状の理解ができなければ入院生活の受け入れも困難となる。この事から、看護者は母親が早く病状の説明を受け入れられるように医師とコンタクトをとり病状が受容できるように支援していく。その際、母親の気持ちが出出できる環境作りを行っていく必要がある。さらに、入院時から児の生活習慣の情報収集を行い、児の症状と治療に合った入院生活に関する情報提供を行っていく事も大切である。小野⁵⁾は、マニュアル化したオリエンテー

ションは印象が薄いと述べている。看護者は、母親が落ち着いてオリエンテーションを受けられる環境作り、母親の不安が出出できる関わりを持ち、入院過程がイメージしやすいように説明をしていく必要がある。

引用文献

- 1) 及川郁子. 子どもの入院が家族に及ぼす影響. 小児看護 1993; 16: 415-418.
- 2) 坂本純子, 大澤扶佐子, 小長根千鶴ほか. 付き添う母親の不安と看護者の関わり. 第28回日本看護学会集録. 小児看護 1997; 154-157.
- 3) 武貞昌志. 入院を余儀なくされた乳幼児と母親への援助. 小児看護 1989; 12: 500-507.
- 4) 藤原千恵子, 石原あや, 永島すみえほか. 入院する乳幼児をもつ両親の不安に関する研究. 小児保健研究 1998; 56: 817-824.
- 5) 小野千代子, 志賀寿美代, 飯倉久美子ほか. 乳幼児をもつ母親が初回入院時に求める情報と実際に得た情報の分析. 第29回日本看護学会論文集 小児看護 1998; 29-31.

参考文献

- 1) 小林八生, 竹田圭子, 西村京子ほか. 入院乳児親のニーズとその要因: 看護婦に求める心理的サポート. 第22回日本看護学会集録 小児看護 1991; 311-334.
- 2) 白川秀子, 谷真紀子, 麻生悦子ほか. 小児看護における母親参加の意義とナースの役割: 母親へのアンケート調査から. 小児看護 1999; 22: 1393-1397.